

題字：木坂
西野一男さん



KAGAWAKU

かがやく

生涯学習情報紙：生きがい探しのパートナー

感動人生！ここに生きる元気な人間びと

的に向かって
こうするんだよ

ようこそ！！

金子ふれあい村へ

▼昔のあそびとものづくりを伝承



▲手作り
おもちゃを
楽しんで



▲子どもから大人まで夢中
なる粘土あそび



▲ペーコトつやつやるの？



▲シラコバト賞を受賞



▲みんなでお料理体験



▲ちんどん屋さんが応援にかけつけました



▲お兄ちゃん
がんばって！



▲老若男女で煎茶体験



▲全員集合！

■三世代交流事業 金子ふれあい村(金子) 地域でつくる大きな輪

2月9日(土)金子公民館で三世代交流事業『金子ふれあい村』が開催されました。17回目を迎えたこの催しを主催しているのは金子地区衛生自治会母子愛育部です。

「子どもからお年寄りまで世代に関わらず、一人でも多くの方に触れ合ってほしい。母子愛育部の地域社会と手をつなぐ」というモットーのように、同世代でも異世代でも声をかけあうような、明るい金子地区にしていきたいと思っ活動しています。でも、やっぱり子ども達の笑顔を見られることが一番嬉しいですね」と笑うのは愛育部部長の長瀬欣子さんです。

『金子ふれあい村』は明るい地域づくりを目指す愛育部の活動の一つです。世代を超えてふれ合う昔あそびやおもちゃ作り、参加者全員が協力し合った料理体験など、会場にいる全員が共に手を取りあっている姿が印象的でした。地域住民のふれあいの場として、様々な世代がそれぞれの立場から協力し合い、この事業を盛り上げていきます。笑顔にあふれた公民館全体がまるで大きな家族のように感じられました。

「テレビゲームなど、屋内で一人でできる遊びをする機会が多い中で、

遊びを通じて教えたり教わったりしながら、世代間での交流を図れるようにしています。学校や地域の団体など、あらゆる方面に呼びかけ協力してもらっています。こういう活動が各地で広がってくれば嬉しいですね」と長瀬さん。

そんな地道な活動の成果が実り、昨年11月には彩の国コミュニティ協議会が主催する「シラコバト賞」を受賞しました。また、現在では金子地区に続けと、市内の5地区においても地域の母子愛育会が中心となって三世代交流事業が行われています。

無限の輝きを放つ地域ぐるみの大きな輪。みんなの力で支え合い助け合う三世代交流事業。次の世代につながる繋がり、次代を担う子ども達の礎となり、その夢を運んでくれることでしょう。

感動！『金子ふれあい村』

シラコバト賞

彩の国コミュニティ協議会(会長は県知事)により、日常の身近なことで、住みよい地域社会の実現のため、積極的な実践活動を続けている個人や団体等に、その功績をたたえ贈呈される賞。



■入間市レクリエーション協会理事 長 双木茂芳さん(会字)

遊びのすすめ

「近年退職を迎えた方々は、高度経済成長期の中ひたすらに勉学に励み、家族のためにがむしゃらに働いてこられた。遊びを知らない方もいらっしゃる。やっとできた自由な時間を、自分のために少しは使っても良いのでは。自分が楽しめば家族への理解や感謝も増し、これからの人生を共にエンジョイできる気もします」と話す双木茂芳さん(63歳)。福祉施設や公民館等でレクリエーション指導を始めて約20年になります。

今日はやまゆり荘で健康安全吹矢の講習会。健康安全吹矢は腹式呼吸の応用で矢を飛ばすので、内臓が活性化され、その機能も向上するそうです。また、体にかかる負担が少ないため、子どもからお年寄りまで幅広く楽しむことができます。

双木さんの巧みな話術で会場内は笑顔でいっぱい。明るい雰囲気の中、楽しく活動することで、参加者の交流も深められます。

「まずは遊びから入ってみて、生涯にわたって継続的に楽しめるものや、それを一緒に楽しむ仲間が見つかると思います」と双木さん。

「スポーツも良いでしょうし、また近くの散策もお勧めです。季節の

花を眺めたり、通りがかった神社や寺の歴史を調べたり、一歩外に出るといろいろ広がりますよ」と、話す双木さんの笑顔はいきいきとかがやいています。



▲健康安全吹矢講習会にて



▲子どもたちとも遊びます



◀思いっきり吹きます



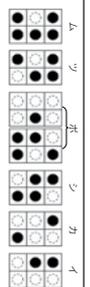
■点訳入間六ツ星会 視覚障がい者に読書の喜びを (豊岡)

「六ツ星」と聞いて何を思い浮かべますか？ 空に輝く星？ レストランの格付け？ 点字で表す五十音の「め」は6個の点で構成されることから「六ツ星」とも呼ばれています。

「六ツ星」を名に冠し、視覚障がいがある方の目になりたいという想いで活動しているのが「点訳入間六ツ星会」です。グループの発足は約40年前、入間市で開催された点字講習会の参加者が集まってスタートしました。現在は35人の会員が活動しています。

会で活動する碓氷美紀子さんと伊藤洋子さんは「障がいがある方にも読書のゆしみを伝えたい」と思い参加しました。点訳の難しい部分は、かな文字でしか表現できないところにあると思います。「同音語や難しい言葉には意味を付記したり、点字独自の表現方法があったりと、点字表記辞典が手放せません」と話します。

グループの発足当時は、点字器での手打ちや点字タイプライターを使用していました。今ではコンピューターで点訳できるようになりました。「手打ちやタイプライターの場合は、打ち間違ったらもう一度最初から全て打ち直さなければなりません



(豊岡)

でした。それがコンピューターに変わったことで、訂正が随分と楽になりました」と大塚あけみさんは言います。平成15年の健康福祉センターの開館時には、センター内に点訳室が設けられ、落ち着いた環境で作業できるようにになりました。

現在、会では「広報いるま」や「いるま市議会だより」を中心に点訳を行っています。また、塙保己一学園(県立盲学校)からの依頼もあり、同校の図書室には会が点訳した本が並んでいます。

5月には社会福祉協議会による点字講習会が開催されるため、会では会員が増えることを期待しています。



▲六ツ星会会員



▲コンピューターで校正

▶点字プリンター

■見月ヴォイストレーニンングサークル（東藤沢）
いい声を出すには「コツがあります」

発声法を習っていた北邑京子（きたのら）さんの呼びかけに6人が集まり、平成13年に『見月ヴォイストレーニンングサークル』が発足しました。

「まずは、体のあちこちにある緊張をほぐしましょう」掛け声に合わせて、首から肩、腰と順番に、左へ右へと回します。トレーニンングは準備運動から始まります。続いて腹式呼吸の練習。ゴム風船を膨らませて、



▲バンド演奏に少し緊張

▲血行を良くしましょう

▲息が良く吐けたかな

自分の息の吐き方を目で見て、確かめます。

「普段、人が息をする時は胸式呼吸をしますが、大きい声を出したり歌ったりする時は腹式呼吸をします。声は息を吐く時に出るので、吸った息をしっかりと吐くことが発声の基本です。健康な体を維持するためにも、呼吸に関心を持つことは大事です」

ヴォイストレーナーの安武優治（やすたけ）さんが解説してくれました。

「柄も四尺、刃も四尺、合わせて八尺の大なぎなた」のような滑舌を良くするための練習もしますが、皆さん見事にすらすらとできます。

練習の最後は、歌う時の発声法の実習です。この日はキム・ヨンジャの新曲を、ピアノに合わせて一小節ずつ覚え、個人指導の後、全員で合唱しました。

「トレーニンングを始めたころは声がかすれて高い音が出なかつたのですが、少しずつ出せるようになり、音域が広がりました」と話すのは入会して2年の林一雄（はやし）さん。

「発声の基本を学んで練習を続けると、張りのあるきれいな声を出せるようになります。口を大きく開けて閉めて声を出すと、口角も上がって顔の表情が豊かになります。周囲が明るい雰囲気になり、人生も変わると思いますよ」サークルが長く続いている秘訣はここにあるような気がします。

毎年、公民館で発表会を開いています。今年は1回目を2月に開催し、安武先生率いる生バンドの演奏をバックに、メンバーの皆さんが得意の曲を披露して好評でした。



■入間市国際交流協会市民スタッフ 本橋キク子（ほんはし）さん（扇台）
虹のかけ橋〜素晴らしい日本の手芸を世界へ〜

ドイツ・ヴォルフフラーツハウゼン市や中国・奉化市と姉妹・友好都市提携をしている入間市では、市国際交流協会による様々な事業が行われています。その市民スタッフとして活動している本橋キク子（74歳）は、手芸を通じて交流に関わっています。

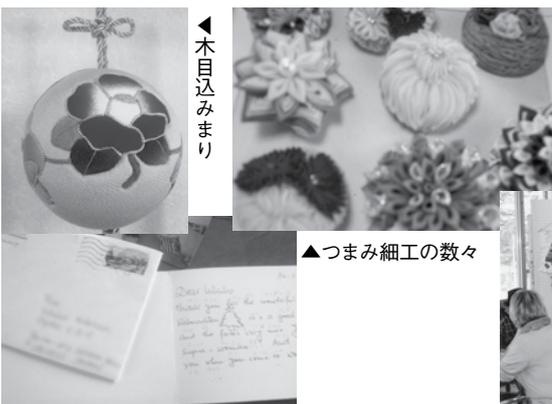
本橋さんは、20年程前に日本手芸指導協会の師範免状を取得して以来、様々な手芸を教えてきました。つまみ細工や、木目込みまりなどの工芸は、日本の美を思い起こさせるものばかりです。

本橋さんが協会に加入したのは師範免状を取得したのとほぼ同時期。「その頃から人気があつた日本の文化を、私の手芸を通して伝えられたらいいな、と思つたのがきっかけでした。そんな想いから、着物の切れ端などの身近な素材でつるし雛や布絵などを作製して、贈るようになりました」と本橋さんは当時を振り返ります。

昨年、入間市とヴォルフフラーツハウゼン市は姉妹都市提携25周年を迎えました。その記念訪問団の日本文化体験の講師を務めたのも本橋さんです。「ちょうどクリスマス前だった

ので、和布を使ってツリーをかたどったタペストリーを作ったんです。お互いの文化をミックスしたのになりました。同じ材料で作製したんですが、それぞれ自分好みにアレンジしてましたね」と話します。

小さな贈り物から始まつた本橋さんの交流は、現在では協会になくても人々から求められています。これからは、都市どうしをつなぐかけ橋として活躍することでしょう。



▲木目込みまり

▲つまみ細工の数々

▲ドイツの友人からの手紙

▲訪問団が手芸を体験



▲「塩づくり」
身をのりだして説明を聞きます



▲みんなそろって記念撮影



▲一人ずつ手渡された修了証

▲「食リンピック」
何の味だかわかるかな？

知的好奇心をくすぶる学び舎

子ども大学さやま・いるま第2期学生代表

横手安絵奈さん(西武)

昨年7月から11月にかけて、小学4年生から6年生を対象とした『子ども大学さやま・いるま』が開校されました。地元の方や企業の協力のもと、5日間・全8講義を終え、入間市、狭山市両市で60人を超える子ども大学生全員が修了証を手にしました。

ここで学ぶ小学生は、生徒でも児童でもなく、みなそれぞれ一人の大学生とみなされます。今年の学生代表の一人として、修了式で挨拶を述べたのは横手安絵奈さん(12歳)です。

「グループで作業をする中で、一人一人が得意なことを活かしながら自分の役目を果たして、とてもいい経験になりました。私は来年中学生なのでもう来られません、ここで学んだことを活かして、友だちと仲良く協力する気持ちを忘れないようにします」小学生とは思えない立派な挨拶でした。

『子ども大学さやま・いるま』は、東京家政大学、埼玉県、狭山市と入間市が実行委員会を組織し、平成23年に始まりました。大学キャンパスを学び舎に、講師は地元のエキスパートや大学教授など、バラエティ豊かな面々が勢ぞろい。授業は「はてな学」、「ふるさと学」、「生き方学」の

3分野で構成され、多様な講義を展開しました。

浮世絵から江戸の世相を読み解く講義や、「しみ抜き」という身近な題材から化学に触れる授業などがあつた中で、「話を聞いて理解するのもいいけど、味やにおいから自分で答えを見つけて、その中で理解できたところが良かった」と、食を題材とした体験学習「食リンピック」が一番印象に残っている講義だったと横手さん。

「班には違う学校の子もいたけど、声をかけたりかけられたりしながら、自然とみんな協力して講義に参加できた。5日間を通して、自分から話しかけることとか、コミュニケーションを取るこの大切さを感じました」と続けます。

将来は環境に関する仕事について、動物の保護に関わりたいという横手さん。子ども大学での経験がこの先どこかで役に立つといいですね。

子ども大学

02年にドイツのチュービンゲン大学で始まり、数年でヨーロッパ各国に広がった。日本では09年にNPO法人を中心に「子ども大学かわごえ」が開校し、埼玉県ではその取組をモデルとし、昨年までに22校が地域の大学を会場として開校している。

◎「いるま学びの場」生涯学習サークル・教室情報募集！

「何か始めたいなあ」とお考えの方、「アレ習いたいけど、どこに行けばいいんだろう」とお嘆きの方。市では、公民館等の公共施設で活動しているサークルや、お近くにある教室の情報を提供しています。そのため、以下に該当するサークル・教室情報を募集しています。

対象

- ☆生涯学習に関わっていること。
- ☆一般市民が参加できること。
- ☆政治活動・宗教活動・悪質な商法でないこと。

- ☆入間市内に活動場所があること。
- ☆年間を通じて継続的に活動していること。

※冊子発行は市教育委員会と入間市生涯学習をすすめる市民の会でを行っています。

こちらのコーナーに関するお問合せは生涯学習課へお寄せ下さい。

●編集後記●

●市民の生活を良くしよう、夜のくつろぐ時間にも地道な活動を続けている団体があります。そういう方たちの気概と努力に、頭が下がります。(ST)

●飽食の時代と言われていた現代だからこそ、食材を吟味して、一つ一つ味わいながらいただけることに、感謝したいものです。(HT)

●東日本大震災から2年がたち、生きるという事を考えさせられる時間でもありました。一瞬一瞬を楽しみ、大切に今を生きていけたらと感じています。(SM)

●朝市に通っています。丹精こめて作られた野菜の味が舌にしみみます。私も心にしみる文章が書けたらいいな。(MK)

●「こんにちは」街を歩いていると、元気な小さな子から声を掛けられます。ヤクルト姉さんも自転車から「こんにちは」挨拶が人の心を豊かにし、街を明るくしてくれています。(NT)



企画編集：「かがやく」編集委員会
発行：入間市教育委員会生涯学習課

お問い合わせ 事務局
入間市教育委員会生涯学習課
〒358-8511 入間市豊岡 1-16-1
TEL 04-2964-1111(内線4123) FAX 04-2964-4841